

(城西人文研究第19卷第2号)

【研究ノート】

## 嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解(二)

黄色 瑞 華

### 凡例

- 一 本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』(所収句八二二、他に俳諧歌一八)の全注解である。
- 一 一行めに『一茶発句集』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に( )に入れて注した。
- 一 二行め以下にⓄとして、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。
- 一 句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は、簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。
- 一 注釈史上、看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峰『名句評釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

## 一 茶 発 句 集

## 春の部(承前)

けろりんくわんとして鳥と柳かな

㊤ 希杖本句集・文政版発句集

▽ 七番日記(文化8・1)、「雁と柳哉」。我春集、前書「九日夜探題」(五句中の第一句)、「雁と柳かな」。

語注 「けろりんくわん」、何事もなく、平然としたさま。

解 青柳に鳥、互いに何のかかわりもなく、ただそこにあるだけ。それでいて妙に落着いたさまである、の意。常套的な、既成の観念を超えようとする『我春集』期の一茶に注目したい。

▼ 川島『新釈』に、「ふつさりと垂れ下つた緑の柳と、剽悍な顔付をした真黒々の鴉(この鴉が柳に止つて居るか、地上或は屋根に止つて居るか、何れとして見るも勝手だ)との妙にそぐはない対照に於て、然もこの静と動との間に七分三分の兼合と云つたやうな引かゝりを見付け出して居ることがこの句の生命である」。勝峰『名句評釈』に、「『けろりんくわん』といふ俗語はいはゆる一茶のものだが、この句全体に漲るものは、いはゆる一茶のものだけでなく、もつと深い、もつと遠い——それは芭蕉の『枯枝に鳥のとまりけり秋の暮』に感ずる汎神的なものを同様にこの句も持つてゐると謂へないだらうか」。暉峻『名句の鑑賞』に、「この句は、お互ひが顔も名も知らず無関心に暮しながら、しかも深く結ばれてゐる人間生活を象徴してゐるやうに思はれます」。栗山理一『俳句講座』4 古典名句評釈(明治書院、昭34)に、「この時の一茶の胸裏にこの枯枝の句がなかったとはいえない。すでに典型ともなったこの自然の取り合わせに対して、一茶の皮肉な反撥があつたと思われる。(中略)ここにもまたおのずからなる自然の姿があるではないか。既成の観念にとらわれない自由な眼で見れば、このとほけた風景だつて造化の天工ではないか。そういう一茶の底意があるう。けれども、そういう底意はいっさい伏せて、さりげなく、ユーモラスな表情をもたせたのがこの句である」。

白猫のやうな柳も御花かな

㊤ 八番日記(文政2・2)

▽ おらが春、前書「善光寺堂前」、上五「灰猫の」。

語注 「白猫のやうな」、白猫の尻尾のやうな、の意。「御花かな」の「御花」は、参詣人相手に売られる「供華<sup>けぼ</sup>」をいう。

「善光寺」の前書を有する別案に、「朝霜やしかも子供のお花売」(八番日記3・10)がある。

解 白猫の尻尾の先のような猫柳であっても「供華」は「供華」の意。

▼ 勝峰『一茶のおらが春』に、「柳にもいろ／＼ある。未央柳は黄色の葩が美しい。猫柳だけは灰色に見窄らしく仏前へ供へられさうもないが、一茶の『御花の代りをつとむ柳哉』の句に照らして、それも仏華にさ／＼げられたのである。川島『おらが春新解』に、「諸国から参つて来る参詣人相手にひさいでいる薄よごれた灰猫のような柳、あれでもお花かと、皮肉な一瞥を投げているようでもあるが、(中略)辛うじて楊柳をお花に供している北信濃の春のわびしさも思いやられる」。

御殿山

鶯も親子づとめや梅の花

㊤ 文政句帳(文政5・1)、浅黄空・文政版発句集

▽ 自筆句集、上五「鶯の」。

解 満開の梅の花に、鶯はしきりにその蜜をあさっている。これも、親を養い、子を養うためにであろうか、の意。一茶が亡父母、夭折の子らに対する思いは、ふとした眼前の情景の中にもよみがえる。

三日月やふはりと梅に鶯が

㊤ 七番日記(文化8・1)、鳥のむつみ(文化11)

解 天にかすかな三日月、地には満開の梅、静かな夕暮れである。そこへ、一羽の鶯が飛来して、梅の小枝がわずかにゆれ動

いた。一茶は、その動きにこの静かな夕暮れを深く認識する。

▼ 萩原井泉水「一茶篇」(国民の文学15『芭蕉名句集』所収、河出書房新社・昭39)に、「『梅に鶯』は古い取り合わせであつてなんの趣味もないけれども、『ふはり』ということばがよく置いてある。そして『ふはりと梅にうぐひすが』と『が』で言いさしたようにとめたところが、不安定なような言い方であつて、その鶯が一たん留つたものの、すぐにもまた飛立ちそうな感じが出ている。つまりリズムが出ている」。

鶯にあてがつておく垣根かな

㊤ 七番日記(文化10・2)・志多良・句稿消息・自筆句集・文政版発句集

▽ 浅黄空、座五「留守家哉」。

解 垣根に鶯が一羽、何を好んでこんな垣根にと、鶯のなすがままにまかせておく、の意。

▼ 川島『新釈』に、「垣に来て頻に鳴く鶯を聞きながら、『お前はお前で勝手に啼きな』といふ風に、ゴロリと肘杖でもして居るらしい一茶の不精さが思はれる。強いて云へば、作者と鶯との無関係な交渉ともいふべきものがこの句をふつくりと肉附けて、前出の二句(注、梅の花こゝを盗めとさす月か／鶯や泥足ぬぐふ梅の花)に見る如き理に落ちることから済つて居る」。

鍬の柄に鶯なくや小梅むら

㊤ 七番日記(8・1)、我春集・稿本発句題叢・文政版発句集

語注 「小梅むら」、隅田川左岸にあった向島の小梅村。

解 小梅村の畠中に鍬が一丁置きざりになっている。その鍬の柄に鶯が止つて高音を張りあげている。一茶は、文化七年の歳末、起死回生の願いをこめて、守谷を拠点に下総一帯の俳士たちの鳩合を図ろうとした。『我春集』の序で、観念的・通俗的な俳諧を批判した一茶は、生活実感を重んじた新しい俳諧を主張し、みずからそれを積極的に実践しようとした。具体的には、「黒土や草履のうらも梅の花」「春雨に大欠やビスル美人哉」というような句をあげうる。「鍬の柄に」の一句もまた、そういう姿勢で詠まれたものであり、「鶯」と「小梅村」の取り合わせはどうでもよく、「鍬の柄に鶯なく」に、その取

り合わせの新鮮さを見るべきであろう。

▼川島『新釈』に、「竹真の十二ヶ月の短冊の絵でも見るやうである。一寸した見つけ所と云ふまでで、大したものではない。ただ私達は今の小梅町辺が小梅村と呼ばれて居た昔の閑寂さを思ひ遣るよすがとして、この句に特殊の親しさを感じるのである。だが、同じ人の『楸の柄に鶯なくや梅が窪』とあるのを見ると、さうした興味の半ばは失はれて了ふ。(中略)そして、云ひたくないことであるが、小梅村と云ひ梅が窪と云ひ、梅に鶯といふ陳腐な取合せの頭に残るのも残念だ」。

鶯の目利してなく我家かな

㊤ 八番日記(文政2・1)

▽ 発句鈔追加、座五「屑家かな」「藁屋かな」。

語注 「目利<sup>めき</sup>」、鑑定・値<sup>ぢ</sup>ぶみ、の意。八番日記の同年七月の条に、「木啄の目利して見る庵哉」。おらが春に、「木つゝきが目利して居る庵哉」。

解 わが家に来て鳴く鶯は、どうも鳴っぷりがよくない。いかにも、家の様を値<sup>ぢ</sup>ぶみして鳴いているようだ、の意。

是程の上鶯を田舎かな

㊤ 梅塵本八番日記(文政2)

解 これほどの上等な鶯の鳴き声を、なんとまあ、何の風情もないこんな片田舎で耳にすると、の意。

鶯のまてにまはるや組屋敷

㊤ 文政版発句集

▽ 八番日記(文政3・1)、中七以下「まてに歩くや組やしき」。

語注 「まてに」、まじめ・律儀なさま。続猿蓑に、「田植歌まてなる顔の諷ひ出し」。「組屋敷」、江戸時代に与力や同心など組

の者が住んだ屋敷町。

解 いましがた向うの屋敷で鳴いていると思つたら、今度はこちらの屋敷で鶯の声が聞こえる。この鶯は律儀に組屋敷を一軒ごとに春を告げまわっていることだ、の意。

袖下はみな鶯や小せき越

㊤ 俳諧千題集(寛政1)稿本発句題叢・希杖本句集

▽ 千題集以下、座五「小関越」。希杖本句集、上五・中七「鶯と袖すりにけり」。

語注 「小関」、所在未詳。

解 関を越えようとするは、いるは、いるは、これはみな鶯ではないか、の意。

松室に遊ぶ

鶯の馳走にはかぬ垣根かな

㊤ 文政句帳(文政7・5)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 文政句帳・浅黄空・自筆句集とも、前書なし。八番日記(文政2・2、2・3||重出)・おらが春、中七「馳走に掃し」。

語注 「松室」、西原文虎の別号。西原文虎は、信州水内郡浅野の油商。通称は左右衛門、俳仏堂・松堂・松園なども号した。一茶門、『一茶翁終焉記』『文虎本・おらが春』などがある。

解 冬の間になれた垣根の繕いもしていない。これも、飛来する鶯の馳走にというのであろう。「やぶうぐいす」ともいうから。

黄鳥や泥あしぬぐふ梅の花

㊤ 七番日記(文化11・2、春||重出)・文政版発句集

▽ 浅黄空、「鶯の泥足拭くや」。

解 咲きそろった梅の小枝で、鶯は泥足をぬぐっているよ、の意。梅に鳴く鶯は、伝統的・観念的世界、それを「泥足ぬぐふ」としたところに、「実感」を重んじた独自の世界を創造しようとする一茶の姿勢がある。

▼ 川島『新釈』に、「中七の『泥足ぬぐふ』が突込み過ぎていて嫌だと思ふ。然しながら、緑褐色の鶯が梅の花を踏んで枝から枝へと身軽に飛移りながら、折々足を摺り合すやうにする可憐な身振りが、『ぬぐふ』といふ語に実によく写されて居る」。勝峰『名句評釈』に、「果してあの小さな足についた泥が一茶の目に入ったかどうかは疑問だが、餌をついばみに泥の上にも下りるとすれば、一茶があながちに汚い方面のみに心を向けると咎め立ても出来ないであらう。只この句の難点としては『黄鳥や』と截離してしまつた所に有るかも知れぬ。『や』を『の』にして、改めて中句の末に置いた方がよかつたかも知れぬ」。

鶯の<sup>(野)</sup>にしてなくや留守御殿

㊤ 文政九・十年句帳写(文政9)・希杖本句集・文政版発句集

▽ 梅塵抄録一茶連句集、座五「留守屋敷」。

解 主人が留守の御殿の庭で鳴く鶯は、あの格調の高さもどこえやら、その声は藪の鶯そのものだ、の意。

鶯やよくあきらめた籠の声

㊤ 浅黄空・自筆句集・さびすなど(文政7)・文政版発句集

▽ 八番日記(文政4・10)、中七「あ「き」らめのよい」。

解 籠の鶯は、落着きはらった様子で、上品な高音をあげている。よくもまあ、野に帰ることをあきらめたものだ、の意。親鸞の教えを疑うことはできないが、それでいて、徹しきれない自身への批判がそこにある。

閏正月

正月のふたつありとや浮寝鳥

㊤ 自筆句集(重出)

▽ 自筆句集(後出句)、前書「閏ありけるに」。八番日記(文政4・9)、上五「正月が」。浅黄空、前書「閏」、上五「正月が」。

解 今年は閏正月がある。そのせいか、水鳥も首を翼の間に入れて、のんびりと浮いている。

老婆洗衣画

彼の桃もながれ来よく春霞

㊤ 杖の竹(文化13)

▽ 七番日記(文化8・12)・稿本発句題叢・文政版発句集、上五「彼桃が」。随斎筆記、「彼桃が流来かよ」。全集本発句篇、この句の出典・前書を「夕暮や霞中より無常観」の注に入れる。

語注 「彼の桃」、昔話・桃太郎の桃。

解 「老婆衣ヲ洗フ画」から、「桃太郎話」の冒頭を連想したのである。

軽井沢

笠でするさらばくやうす霞

㊤ 七番日記(文化14・2)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 七番日記、前書「軽井沢春色」。

解 薄霞のたなびく早朝、互いに霞の中に消えていく者同士が、いつまでも後をふり向いては、旅の笠を振って別れを惜しむ。一夜をともした二人であろう。

▼ 川島『新釈』に、「別離と云つても、いかにも春先らしい長閑な気分が漂つて居る」。勝峰『名句評釈』に、「笠でさらば

をしているのは他の二人である。一人を一茶としてゐる本も有るが、首肯出来ぬ。一茶は宿屋の座敷か軒先にか、或は宿を出かけて居るのだ。今朝迄相宿してゐた他の客人が一茶より先に同時に宿を出て、やがて彼方の岐れ路で、別れの挨拶を交してゐるらしい。(中略) 何といふこともない興味を以て見送つて居た一茶には、旅の愁といふやうな心持が一層切実になつて来た。恐らくかうした点景情趣を詠じたものであらう。一人が自分自身であつては『笠でするさらば』がかしい。それでは印象的に殊語法で叙述したといふよりも、聾啞者の別れの挨拶と取られ易くはないか。『軽井沢』の前書はこの句に格別命を賦してゐる。その近くには中仙道を二つに分ける追分が有り、一方には碓氷の峠が有る。二人の別れたのは何処で、一茶の見て居る所は何処であるか、はつきり判らぬにせよ、宿場外れの薄霞中の点景は充分に察して見ることが出来る。暉峻『名句の鑑賞』に、「同じ宿に泊り合はせた旅人同士が、一緒に朝立ちして、一人は信州へ、一人は上州へ、峠の上で袂を分つたが名残が惜しまれ、霞の中にうすれ行く相手に向つて笠を打ち振り別れを惜んでゐる、長閑な中に哀愁をたたへた春の旅情であります」。

西山やおのれが乗るほどの霞

- ㊤ 七番日記(文化10・2)・志多良・句稿消息・双樹あて書簡(文化10・3・10)・文政版発句集  
 ▽ 双樹あて書簡、前書「生残りて物淋しき折から」。浅黄空、中七「おれが乗のは」。自筆句集、中七「おれののるのは」。  
 解 西の方角に連なる山並に、春の霞がたなびいている。はて、自分が極楽往生の時に乗るのは、どのあたりに見える霞だろうか。「西山」に「西方浄土」を、「霞」に弥陀仏の「来迎」を連想し、言い掛けたのである。

茶鳴子のやたらに鳴や春がすみ

㊤ 句稿消息(文化11)

- 語注 「茶鳴子」、農村などで茶(休憩)の時刻を知らせるのに使った鳴子。  
 解 霞がたなびく長閑な春の日である。今日はまた、やたらに茶鳴子の音がすることよ、の意。「鳴子」を鳴らすのは、茶の準備をする人ではなく、茶を入れてもらう方の人であらう。

牡丹餅を喰はへて霞鳥かな

㊤ 嘉永版発句集初見

▽ 句稿消息、中七「つかんでかすむ」。八番日記(文政4・2)、中七「見せくかすむ」。

解 地藏さんにも供えられた「ぼたもち」であろう。それを、鳥がさつとさらうようにくわえて飛び去ったのである。

霞日や夕山かげの飴の笛

㊤ 文化句帳(文化2・1)・稿本発句題叢・希杖本句集

▽ 七番日記(寛政元ヨリ文化六迄)、座五「笛の飯」<sup>(飴)</sup>。発句鈔追加、中七「夕山かけて」。自筆句集、上五「霞けり」。

解 霞たなびく長閑な春の夕方、いかにものんびりとした調子で、飴売りの笛の音が、山陰のあたりから聞こえてくる。

▼ 丸山『小林一茶』に、「霞がたなびいて、なま暖かく、とろけるような春の夕べ、近くの山陰から飴屋の吹く笛の音が聞こえてくる。その笛の音に誘われて、幼い日のことが甘く、なつかしく想い出されて、淡い哀愁が胸をひたしてくる。

(中略)主観の露出を避け、適度な感傷と甘い詩情をたたえた佳吟であり、のびやかな調べにも、快い郷愁が流れている」。加藤楸邨『一茶秀句』(昭39・春秋社)に、「これは、童心の世界であるが、この少年の日の夢は、今は一茶の貧乏で孤独な現実からは郷愁のような世界であった。いわば、春霞に誘われて家を捨てたくなったその現実の彼方の世界だといってもよいであろう。少年の日、祖母の背で、あるいはひとり背戸の木に凭れて耳にした飴の笛を、霞の中で思い起こしている姿が見えてくる」。栗山理一『小林一茶』(昭45・筑摩書房)に、「霞がたなびき、風も凪いだ春の日もようやく暮れかかろうとする頃、近くの山陰から飴売りの吹きならす唐人笛が聞こえてくる、という風物詩である。江戸時代、中国人の衣服を着て、チャルメラを吹きながら飴を売り歩いた者がいた。飴の笛は子供心をそそりたてるものであり、この句にも一茶の幼年時代への追憶がたたみこまれていよう。

霞日やしんかんとして大座敷

㊤ 八番日記(文政2・2)・おらが春・発句鈔追加

解 霞たなびく戸外はなま暖かく、けだるい気分がただよっている。この大座敷は「森閑」として、薄暗く、全くの別世界である。生活に追われて、あくせくと動きまわる者の住む世界と、この大座敷に住む者の世界を対比したのである。

▼ 川島『新釈』に、「『霞む日や』と、上五を概念で覆うて、扱て又立戻つて来て、概念の中にしみぐと浸り込んで居るやうな作である。甘い潤ひを含んだ寂しき。静けさ。……大寺と見るも大家の広間と見るも問題ではない。作者の捉へて居るものは、気も遠くなるばかりの春の静けさである。此所まで来ると、一茶も或所に行着いて居る。無形のものも捕へ得て居るといふ感じを深くする。生涯を自然と旅に任せて居たやうな漂泊の詩人芭蕉も、人事にかまけ世路難に惑ひながらも一意に俳道に執して居た一茶も、期せずして一つ流れに合して、此所で一寸顔を合せて居るやうな気がする」。勝峰『一茶のおらが春』に、「かすみは自然の動きを日すがら覆ひ、しんと澄むやうな静けさは、ものゝ影を曳かず、四壁を這つてこの大座敷をつゝんでゐる。闕のきしみが微かにしても、はねつかへすやうに壓へてしまふ。人氣(ひとけ)の絶えた大座敷である。(中略)自然を霞で、座敷を静けさで結ぶものは『大』の字の蝶交ひがあるからである」。加藤『一茶秀句』に、「野も山も飄蕩たる霞の中に罩められて、茫乎とした視界、身を置く大座敷だけがしんかんとして音もない。あまりに静かでひえびえしてくるやうな暈の青さでもある」。宮本三郎『俳句大観』(昭46・明治書院)に、「あたり一面霞がぼうっとこめていゝる春の真昼時、もの音一つしない、しんとした静けさである。寺の大広間か、大家の大座敷か、柏原ならば、さしずめ大名のとまる本陣の家構えか、全く人氣の絶えた大座敷のさまであろう」。

### 横乗の馬のつゞくや夕霞

㊤ 八番日記(文政2・2)・、発句鈔追加

▽ 八番日記(2・3)・おらが春、座五「夕雲雀」。

解 霞がたなびく、おだやかな春の夕べ、駄馬を曳く男が、途中まで迎えに出たわが子を馬の背に「横乗り」にさせて家路をたどる。季語の「夕霞」のもつ趣味がよく利いて、のどやかな春の夕べの光景を描きだしている。この句、推敲して座五を「夕雲雀」とし『おらが春』にも収めるが、再案の方を評価すべきは言うまでもない。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「やはり農作を終へた百姓が煙管を呷へなどして、帰路を共にしての一刻であらう。夕日は山の端に沈まうとして余光を日に焼けた農民たちの首筋に投げてゐる。一日を鳴きつくした雲雀も最後の奏曲を天降らしている。

田園の日永はかくて長閑に終幕しようとする」(座五「夕雲雀」の評釈)。川島『おらが春新解』に、「駅伝の送荷をすませた駄馬の列でもあろうか。馬子たちは一日の労働に疲れて、しかし、ゆったりとした解放感を味わいながら、はだか馬に横乗して各々の家路をさしていく、道のほとりの麦畑には、ねぐらをととのえる雲雀がかしましく鳴きつれ飛び交うている。夕日はのどかに馬上の人の頬かむりを染めていたことであろう」(座五「夕雲雀」の釈)。

### 霞けりにくい宿屋も迹の村

㊤ 八番日記(文政2・3)・自筆句集

▽ 自筆句集、前書「旅」。浅黄空、座五「迹の駅」。

解 昨夜不快な思いをさせられた宿屋もすでに霞のかなた、気分を改めて次の目的地に向って足を進める、の意。

▼ 黒沢『研究』に、「意味は憎かった宿屋も迹の村となり其の村は霞んで了つたといふので、旅をした時の句でありませう。或村の宿屋へ泊つた其の宿屋は宿賃を食るとか色々憎き宿屋であつたのでせうがそれも早や迹の村となり霞に取こめられて了ひ、ほのかに霞の中に隠見するところを見ると景色も美しく、憎いなぞの感が薄らいだといふやうな場合であるらしいのです。伊藤『一茶集』に、「昨夜冷遇された宿屋もすでに霞の中の遠景となつてしまつた」。

### 菜翁と遊ぶ

### 此門の霞むたそくや墨田の鶴

㊤ 俳諧老が染飯(文化7)・文政版発句集

▽ 七番日記(文化7・1)、「巢兆五十賀」と前書して、「柴の戸やかすむたそくの角田鶴」。巢兆五十賀集『よろこびさうし』(文化8)に、「此門の霞むたそくや隅田の鶴」。

語注 「菜翁」、建部巢兆の別号。「たそく」、たしまえ、おぎない、の意味。多足。

解 瑞雲のごとく霞たなびく「この門」に、さらにそれを補足するように墨田の鶴が舞っているよ、の意。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「この家の縹渺と霞むとした所に仙人の棲む霞の洞といふ幻想で長命隆昌を寿したものであらう。

その上錦上に添へる花として祥瑞の鶴を配したのである。今と違つてその当時田園的趣致を多分に持つて居た隅田川のほとりには事実白鶴が来儀したであらう。賀句として一佳作たるを失はない」。

### 還暦の賀

老松やまたあらためていく霞

#### ㊤ 発句鈔追加

▽ 発句鈔追加、前書「文政九年梅堂六十一の賀」。梅塵抄録一茶連句集、前書「文政九年三月三日、梅堂老人の六十一を賀す」。中七以下「改めてまたいくかすみ」（一茶・梅堂・梅塵三吟歌仙）。文政九・十年句帳写（文政9）・希杖本句集、前書「年賀」。中七「改めて又」。勝峰晋風『一茶名句評釈』には、「栗之六十賀」の前書を付して「古松や又あらためていく霞」とある。「栗之」は、西原文虎（前出）の父で一茶門。

解 還暦の山岸梅堂を庭の老松に見立て、この上さらに幾春の齢を重ねんことをと詠んだ。梅堂は信州中野の人、その息梅塵とともに有力な後援者でもあった。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「栗之六十賀」の前書を持ち、上五を「古松や」としたものの評釈に、「『古松』で栗之の寿をあらはし『いく霞』で幾春をあらはす。恐らく栗之の家の庭に老松が蟠踞してゐたのを取材したもの」。

誰それとしれて霞むや門の原

#### ㊤ 文政句帳（文政5・2）・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

解 大きな構えの門前のあたりに、霞がたなびいている。霞はあの構えが、「誰それ」の邸宅と知ってであらうか。

けふもく霞んで暮す小家かな

#### ㊤ 句稿消息（重出）・文政版発句集

▽ 七番日記(文化12・2)、上五「菜も蒔て」。浅黄空、上五「菜も蒔て」・座五「山家哉」。自筆句集、上五「菜〔も〕蒔いて」・座五「山家哉」。七番日記(9・5)、「けふもくくだまつて暮す小鴨哉」。七番日記(10・10)、「けふもくくく小春の雉子哉」。

解 名もない者の住まう小家は、毎日毎日が浮世のはてに霞んでしまっている、の意。

▼ 川島つゆ『一茶の種々相』(昭3・春秋社)に、「霞んで暮す小家かな」の勝れている点は、今日もくくといふ重語が、おのづから、単調な安穩な生活のリズムと一致して居る点にある。其処には、いかにも小さい、然も悠久な人間のいとなみが倦むことなく繰返されて居るのだ。昨日も今日も、今日も明日も、明日もあさつてもといふやうに、悠々とした気分が一句を貫いて居る。中七『霞んで暮す』の語法も老巧である」。

### 某母八十八歳賀

#### 門島や米の字なりの雪解水

㊤ 素鏡あて書簡(文政6・3・1)・文政版発句集

▽ 文政版発句集、前書「素鏡が母八十八歳賀」。文政句帳(文政6・1)、前書「八十八」、「米の字にきへ残りけり門の雪」。

解 庭畑の雪も、この家の老婆の長寿を祝うように「米の字」に解けているよ、の意。前書の「某母」は、書簡・文政版発句集により住田素鏡の母。素鏡は名を保堅、通称を奥右衛門といい、信州水内郡長沼の人。一茶門。『たねおろし』(一茶代撰)がある。

#### あさましやちよつとのがれに残る雪

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解 あさましいことであるよ。雪でさえ、わずかな時間の延命をはかって、消え残っている。

#### 鍋の尻ほしならべたる雪解かな

㊤ 八番日記(文政2・1)

▽ 七番日記(文化11・3)、「十ばかり鍋うつむける雪げ哉」

解 晴れ渡った青い空、陽光に輝く白銀の雪、雪解水で煤を洗い落された鍋が尻を上に向けて干し並べてある。明るい春の気分を、光のコントラストとともに、「鍋の尻ほしならべたる」という人間の営みをもって表現してある。

▼ 川島『新釈』に、「雪解で水嵩の増した流れで鍋を洗って、流れのほとりにずらりと干し並べてある様である。家居に近く水の流れる山近い宿場の景色などが想像される。長い間虫けらのやうに引籠つて居た人達も、雪解の頃になると漸く身体ものび／＼して来て、今まで煤け次第に放つておいた鍋などもはづして綺麗に洗つて見たくなる。その気分。その景色。季節と密接な交渉を持つ人間生活を、僅に『雪解』と『鍋の尻』を配して能弁に物語つて居る」。黒沢『研究』に、「実に山近い宿場の景色が想像されます。長い冬ごもりの生活から開放された人々は雪解の頃になると身も心ものび／＼して来るのであります。永い間きたなくしてゐた鍋や釜を洗ふ——」。暉峻『名句の鑑賞』に、「雪の解ける時分は、大方ほかほかとして空は青く晴れ渡つてゐるものです。久し振りの上天気、家々では雪解川で鍋を洗ひ、流れのほとりにずらりと干し並べてゐる。家居に近く村の中を川の流れてゐる田園の情景です。『鍋の尻』といふ一茶らしい無遠慮な表現が、却つて粗朴な田舎の生活を髣髴せしめてをります」。

### 雪解や鷺が三足立白に

㊤ 七番日記(文化14・1)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

語注 「立白」、地面にすえて餅などをつく白。ここでは、「立白」状の切株をいうのであろう。

解 雪解の時期、立白状の切株に鷺が来て止っているよ、と解しておく。荒々しい雪国の冬が一転して、雪解けの静かな季節となる。残雪の間に黒々と浮び上がった切株、その上に静かに翼を休める鷺がある。

世にあればむりに解すや門の雪

㊤ 文政版発句集初見

▽ 七番日記(文化12・1)・上五「世に住ば」。浅黄空、上五・中七「世に住ばむりニとかすぞ」。自筆句集、上五「世に住

で」。希杖本句集、上五・中七「世に住めばむりに消やすぞ」。

解 この世にあって、生活していくためには、残雪の一片まで、むりやりに消してしまわなければならない。残雪に冬の名残りを惜しむなどというのは、北国の冬を知らない人のことであって、地面が出るまで掘りつくさなければならぬのである。

▼ 前田利治『一茶の俳風』(平2・富山房)に、「門口に積った邪魔な雪よ。春になって自然に解けるまで待ち切れない。浮世の義理で無理に解かすぞ」。

庵の雪下手な消様したりけり

㊤ 七番日記(文化10・3)・志多良・句稿消息・文政版発句集

▽ 句稿消息(別案)・浅黄空、自筆句集、上五「門の雪」。

解 出入口あたりの雪を消すのに、下手な消し方をしてしまったのでドブドブと水が溜って歩きにくい、の意。人の出入するようなところは、雪の消え方も早い。そこへ軒下などに積った雪をくだいて投げ入れるのである。見た目ではなく、実際の生活と解したい。

門前や杖でつくりし雪解川

㊤ 文政版発句集初見

▽ 八番日記(文政2・2)、中七「子ど」[も]の作る、同(4・12)、「門先や童の作る雪の山」。

解 家の出入口に、水を含んでわずかに残っている雪に、杖の先で筋をつけ、解けて流れるようにしたのである。それを「雪解川」としたところに俳諧性がある。

▼ 川島『新釈』に、「庇の点滴にきら／＼しい日が輝いて、門先の積雪は刻々に消えて行く。飽和し切った地面は一面にぶよ／＼として、雪解の水が行き場に迷って居る。それを一寸杖の先で按排してやると、直ぐと可憐な小流れが出来るのである。さうした戯れにも似た事象の中に、私達は何となく自然の懐ろに抱かれる和やかさを感じる事が出来る。万心は是れ一心。一心は是れ方法。といふやうなむつかしい理窟は後廻しとしても、兎に角気持がい／＼。傷しいほど人事にかまけて了った作者も、斯んな小さなところに、ホッとした休息を持つたらうと思はれるやうな作である」。勝峰『名句評釈』に、

「或日の一茶の手すさびである。日も一日々と長くなり、寒気も一日々と薄らいで行く。(中略)一茶は手にした杖で線条を地面に引き引き水を窪地の方へ落してやる。(中略)小半時もかゝるとやがて水は路を得てずん／＼流れて行くやうになつた。軽い疲労を覚えた一茶はやれ／＼と腰を伸して流れて行く水に目をやりつゝ満足しきつて居る。その満足感が『雪解川』と誇張した表現になつたのだ」。

三日月はそるぞ寒さは冴かへる

㊤ 七番日記(文化15・1)・文政版発句集

▽ 自筆句集、中七「そるぞ嵐〔は〕」。

語注 「冴かへる」、春になつて寒気が再びもどつてくることをいう。春の季語。

解 澄んだ夜空に、三日月は反りかえっている。また寒さがもどつてくるぞ、の意。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「西の山の端にきらめきそめた三日月の利鎌が、料峭たる寒気を更に冷え／＼と感じさせる。それをお『三日月はそるぞ』と強い言葉で表現したのである。川島『一茶集』に、「一旦ゆるんだ肌にしみ通る春寒と、さえた空にかかる三日月の鋭い光りとを、微妙な感覚で受けとめている」。宮本『俳句大観』に、「空には細く光り反つた三日月がきらりと鋭く光っている。いったん緩んだ寒気がぶり返して、肌を刺すような冷たい風が身にしみる。そういう微妙な情景を俗語をもつて平明に感覚的に詠んだ句である」。

藪入や三組一所に成田道

㊤ 俳諧千題集(寛政1)

▽ 七番日記(文化14・1)・浅黄空・自筆句集、中七「二つに」。

解 同郷の三組であろう。それぞれ奉公先のことなどを語りあいながら各人の家路・成田道を急ぐ。正月十六日前後、まだ風は冷たい。「三人一所」にあることよって、その冷たさを感じさせない。

藪入や墓のまつ風うしろ吹

㊤ 七番日記(文化9・2、7・3 Ⅱ重出)・文政九・十年句帳写(文政10)

▽ 文化句帳(文化1・1)、中七以下「先つゝがなき墓の松」。

解 藪入に帰郷、父母の眠る墓であろうか、その墓の前で手を合わせていると、背後を冷たい風が吹き抜けていった、の意。かつて、自身が帰郷時に得た体験と重なっている。「まつ風うしる吹」が、奉公先を含む世間の空気を象徴的に表現するこ  
ととなった。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「店奉公からのそれではないが、たまさかの故郷入を、亡父母に対するいつも子供の様な気持を続けて居た一茶は、殊更にそれを藪入といふ語に表出したのであらうと思はれる。(中略)亡き人達の眠る静な墓域、そこにはいつも見馴れた松が、いつも変わらずに立ち並んでゐる。合掌し額づき終ると、颯々たる松籟が耳に入り、首筋や袖袂にその風の動きがしめやかに感じられる――。親の前につましましやかな、美しい一茶の姿である」。丸山『一茶』に、「ここでは、たまさかの帰郷を、亡き父母に対する子供の様な気持から、ことさらに藪入という語で表わしたと思われる。(中略)親の墓前に額づくことが、親の膝下に帰る藪入の子と同様の感を、いつも彼に抱かせたのであらう。(中略)松籟を背にして、その墓前に額づく一茶の後姿は、度ましく、また美しい」。宮本『俳句大観』に、「墓前に額づく」と、松風が自分の背後に颯々と吹き渡ってゆくという、静かでさびしい情景を詠んだもので、いわゆる一茶調とは趣を異にしたしみじみした句である」。

芽出しから人さす草はなかりけり

㊤ 八番日記(文政2・2)・自筆句集・文政版発句集

解 芽を出したところから人をさすような草はないのである、の意。「古郷やよるも障も茨の花」(文化7・5)、「古郷や近よる人を切る芒」(文政3・9)などがある。

はや淋し朝がほ蒔といふ畑

㊤ 株番

解 朝顔を蒔く畑と聞いて、その薄命な花の様が思われる、の意。

藪入のわざと暮や草の月

㊤ 享和句帳(享和3・12)・七番日記(文化12・12の条に「寛政元年ヨリ文化六年迄」の部として)・希杖本句集・文政版発句集・近世発句類題集

▽ 稿本発句題叢、中七以下「わざと暮れしや二日月」。

語注 「草の月」、草むらから出た月。ここでは、野道の月。

解 藪入りに帰宅した若い奉公人は、自分はもとより、家人も別れ難くて「わざと」時間を過ごすことになって、野道の月を仰ぎながら主家への帰途に着くことになってしまったのである。

▼ 前田『一茶の俳風』に、「一句は江戸郊外の藪入り風景を詠んだものであろう。親もとに帰った子は、早目に一家団欒の夕食をすませて主家に戻るのであるが、名残りを描んでいる間に戸外の枯れ草藪に月が上がり、ついには母親と主家まで月夜の道を迎えることになる。中七の『わざと暮れしや』(わざと夕方までぐずぐずしている)の人情の穿ちに戸外の景の『草の月』をあしらい、武蔵野の広大な情景(「武蔵野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ」読人不知)を彷彿させて、川柳的発想から脱している」。

#### 店開賀

福の来る門や野山の朝笑ひ

㊤ 自筆句集・文政版発句集

解 前方に広がる野山は朝日に輝いて、いかにもこの店の繁昌を約束しているようだ、の意。

かくれ家や猫にもいたふ二日灸<sup>(は)</sup>

㊤ 自筆句集・文政版発句集

▽ 自筆句集、中七「猫にも祝ふ」。八番日記(文政2・2)、「かく〔れ〕家や梅<sup>(猫)</sup>にもすへる<sup>(灸)</sup>」。同(2・3)、「かくれ屋や猫

にもすへる<sup>(多)</sup>。おらが春・李園あて書簡(文政2・2・15)、中七「猫にもすへる<sup>(多)</sup>」。八番日記(文政2・12)、中七以下「猫にも一ツ御年玉」。

語注 「二日灸」、陰暦二月二日、あるいは八月二日にすえる灸。『俚言集覽』に、「世話尽」二日灸八月にも云馴つれど二有ハ初を用。「木食楚仙独吟 紹巴評」手足のあさにやいとをぞする(といふ句に)土用もや今日の二日に明ぬらん。二日やいとの心に候や」。

解 二日灸をすませたあと、かたわらでじつとのぞき込むようにしていた猫に、お前にも一つと、その鼻先に火のついた線香をつきつける、の意。驚いた猫の、のけぞるさまに「をかしみ」がある。

▼ 勝峰『一茶のおらが春』春に、「この句は嘘だ。読者をからかひ過ぎるともいへないが、猫に灸はどうだらう。猫は熱いものは食べない。火の気、殊に艾のぢりく灼ける臭<sup>か</sup>さ、それをすゑるとなれば暴れて手におえないであらう。(中略)かくれ家には人に逢ひたくない。人を避ける気分を含んでゐる。そこで猫への愛は強くなる。万病を除く二日灸を猫の達者を願つて、すゑてやりたい気分には同感される。これを一茶のわるさ、いたづらには解したくない」。川島『おらが春新解』に、「これは二日灸をすませたあとの軽々した気分で、それそれお前にも一つと、猫の鼻先に煙の出る線香をつきつけて、逃げまわるのをもしろがっているような、つれづれな、しかしなごやかな家庭風景である」。中島『小林一茶集』に、「世捨人が、退屈まぎれに猫にまで二日灸をすえている」。

初 午

花の世を無官の狐鳴にけり

㊦ おらが春

▽ 八番日記(文政2・3)、前書なし。上五「初午に」。同(2・3)、「花の世に官ほしげなる狐哉」。

語注 「初午」、陰暦二月初めの午の日。この日の稲荷社の例祭。「無官の狐」、正一位稲荷大明神の眷属以外の狐。野狐。解 花の世に、野狐はわれも「官位ほしや」と鳴いている、の意。

▼ 勝峰『一茶のおらが春』に、「木立の常緑に映ずる赤鳥居はその象徴で、民間信仰を美しく彩つて見せる。初午の太鼓が長閑に響いて、梢の苔も日にく膨んで行く。花の咲く世界となるのも近い。人に憑いたり化かしたり無籍者の野狐も、初

午の太鼓に踊らされて鳴く」。川島『おらが春新解』に、「京都稻荷山の本社社格(祭神に対してではない)が正一位であるために、全国津々浦々の末社、どぶ臭い路次裏の祠に至るまで、正一位の幟を立てている。その稻荷の神体又は召使の狐(俗信)ではなく、ただの狐がわびしげに鳴いている、自然の花もけしき立ち、一方は笛太鼓や赤飯で祝われる得意の時節であるのに。というほどの意。時めく官僚狐に対して野狐のみじめさを対照させたところが一茶らしい」。中島『一茶集』に、「花にうかれて、正一位稻荷大明神ならぬ野狐までが、うれしげに鳴いている」。

歯も持たぬ口にくはへてつぎ穂哉

㊤ だん袋(文政6・2)・自筆句集・文政版発句集

語注 「つぎ穂」、接木をするとき、台木につぐべき小枝や芽。接穂。

解 すっかり歯の抜けてしまった口に、接穂をくわえて、接木の台木を整えている、の意。しっかりとくわえた口周辺の皺に老の哀愁があり、接木をする老人の姿に、歯のない自身の姿を重ねてある。

夜に入ば直したくなるつぎほかな

㊤ 文化句帳(文化5・2)・発句鈔追加

▽ 稿本発句題叢・希杖本句集、上五「夜に入て」。

解 接木をしたその夜、昼間の仕事をふりかえり、接穂が満足につくかどうか不安になったのである。

山焼の明りに下る夜舟の火

㊤ 嘉永版発句集初出。座五「夜舟の火」は「夜舟哉」の誤記か。

▽ 七番日記(文化15・3)・自筆句集・だん袋・発句鈔追加とも、座五「夜舟哉」。

解 山焼きの火が明るく川面に映じている。その光りをたよりにするように、一艘の舟が川を下っていく、の意。

▼ 宮本『俳句大観』に、「早春のころ、去年の雑草雑木に火をつけて野や山を焼くと、あとに新しいよい草が萌え出るので、

野焼き・山焼きが行なわれた。夜暗くなると、その山焼きの火が川面にまで映えてくる。その火明かりを受けて流れ下ってゆく舟を詠んだもので、静かな平明な客観写生句である」。

畑打や子が這歩行つくし原

㊤ 八番日記（文政2・1）

▽ 中七「子が這歩く」。

解 畑打ちに幼児を連れて出る。これはごく普通のことであった。母親は畑打ちに汗を流し、子を見る暇もない。その間に子どもは、ほどよく伸びた土筆（つくし）の上を這いまわっている。泥んこになって。この年の六月に夭折する愛娘さとの成長を、楽しみに生きていたころの作である。

▼ 黒沢『研究』に、「農民には春先が一番忙しいのです。そのときは可愛い子供でも、ひとりぼっちで草原に這ひ放しであります。休息の時間が出るまで子供は乳にありつくことが出来ぬ——土筆をむしりながら原つばを這ひぬたくつてゐると云ふのです。健康さうな農民の子供が見えるやうです。立派な生活詩と云ふべき句であります」。丸山一彦『近俳句俳文集』（古典文学全集、昭47・小学館）に、「土筆の生えている原に、子供を勝手に這いまわらせて、親は畑打ちに専念している。空には雲雀がさえずっていそがしい、一見のどかな田園風景であるが、一茶はそこに、野趣というにはあまりにいたいたしい農耕の実態を見ているのであろう、畑打ち、畝立て、種まきなど、忙しい農作業に追われて、子供を顧みる暇もないのは、農村では今も珍しいことではない」。

畑打や田鶴啼わたる辺り迄

㊤ 嘉永版発句集初見

解 広大な畑地である。遠くに鳥の鳴きわたる、そのあたりまで果てしれず続く台地を、農夫は一畝ずつ耕していく、の意。関東平野の大きさに驚いた日の感動を、思い起したのであろう。

一年を売て親を養ふは孝行云んかたなし

出代や汁の実なども蒔て置

㊤ 文政版発句集初見

▽ 文政句帳(文政6・1)、前書なし。中七「迹の汁の実」。

語注 「一年を売て」、一年間のわが身を売って。年季奉公に出ること。「出代」、奉公人が雇用期限が切れて交替すること。

ここでは、新たに奉公に出る、の意。年季奉行は春、半季奉公は春秋二回。元禄八年(一六九五)の「町触れ」で、三月五日と九月十日とに定められた。

解 年季奉公に出る直前、年老いた親のために「汁の実」に使えるものを蒔ておく、の意。すぐ手のとどく屋敷畑に、ネギや青菜などの種を蒔いたのであろう。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「さて本句の出代はこれから新に雇はれて行く者、しかも一年を不在にするから、年とつた親の為に、家を出ようとする直前に、畝を取つて汁の実にする物を蒔いて行くといふ健気にもやさしい孝行息子を詠んだのであるらしい」。

出代やいづくもおなじ梅の花

㊤ 七番日記(文化10・3)・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・浅黄空・文政版発句集

▽ 自筆句集、上五「出代りよ」。

解 その季節の「梅の花」に、初めて奉公に出る少年少女のういういしい心の内や姿を擬した。

出代の市にさらすや五十顔

㊤ 八番日記(文化2・1)・発句鈔追加

解 生涯、自立することもならず、出代の季節になると、周旋屋の店をたずねる五十男である。「市にさらすや五十顔」に、この男の悲哀が詠み込まれている。

▼ 伊藤『小林一茶集』に、「人生五十年にしてなほ家をなさず、相変らず出代奉公人として周旋屋の門に出入する男の哀れやよ」。

二月十五日雪降けるに

花のところへ雪のふる涅槃哉

㊤ 文政句帳(文化6・2)・文政版発句集

▽ 文政句帳、前書なし。上五・中七「花の所へ雪が降る」。

語注 「二月十五日」、釈迦入滅の日。涅槃会。

解 満開の桜の花に雪が降りかかっている。涅槃会の季節だということに、の意。

御ねはんやとりわけ花の十五日

㊤ 八番日記(文政2・2)

▽ 上五・中七「御涅槃やとり分花の」。

解 涅槃会のは桜が満開の季節。それにしても今年の涅槃会はちょうど、桜が満開の日に当たったことだ、の意。

小うるさい花が咲とて寝釈迦哉

㊤ おらが春

▽ 前書「二月十五日」。座五「寝釈迦かな」。発句鈔追加、上五・中七「眼の毒の花が咲くとて」(左注に、一書ニ小うるさいト上之字アリ)。

語注 寝釈迦、釈迦の涅槃像・臥像。

解 釈迦の涅槃像を楽寝の人に見立てたのである。「小うるさい」という俗語を用いながら、信仰の対象を卑俗の世界へひきずり降ろしたところに俳諧性がある。そのスケールの大きさ、奇抜さに注目すべきである。

▼ 川島『新釈』に、「人間に対してひどく弱虫で臆病であつた一茶も、彼の住む唯一の世界とする芸術——芸術といふ上品振つた言葉さへ彼にはふさはしくない気がする。寧ろ作句の世界と云つた方が適当かも知れない——に於ては随分腕白で皮肉で、蔭弁慶の反抗家でもあつた。それが何時か、世人の所謂一茶の特色を成したもので、この句などは其特色を最もよく

發揮して居る。(中略)あの、ゴロリと横になつたお釈迦様の寝姿は、涅槃といふ神秘的な感じよりも、どうかすると一寸した小休みといふ感じの方が強くするものである。「小うるさい」は、作者の感情を直ちに対象に移入したまでである。作者の主観と鋭い観察眼とが、其処にカチリと火花を散して居る。勝峰『一茶のおらが春』に、「あゝして彩色された絵の中で寝てゐる釈迦は、薪の林のけむりとなつたのではない。あれは人間が花に酔つてわめき、唄ひ、踊るのが見苦しい爛漫の春となつたので、暫く小うるさい娑婆を逃げる空寝入である。しんから睡つてなぞ居はしない。況んや死になんかされる筈がない。嘘なら起して見るがいゝ、あゝ、うるさいつと大喝されるかも知れないぞ。寝釈迦をかう解釈する一茶は、だん袋に同じく二月十五日の題で、『せうばんに我もごろり涅槃かな』と、釈迦と紙一枚の擬態を行つてゐるのである」。中島『小林一茶集』に、「二月十五日は釈迦入滅の日で、寺では釈迦涅槃図を飾つて法会を行なう。ちょうど桜の花の咲くころである。やれやれ、花が咲くと世の俗人たちが浮かれ騒ぐので、こうるさいことだと言わぬばかりに、お釈迦様は寝てござる、というユーモアなのである。卑俗なおかしみが板について、危げがない」。宮本『俳句大鑑』に、「陰曆二月十五日は釈迦入滅の日として、各寺院では毎年涅槃像をまつて涅槃会という法会を行なう。折からちょうど桜の花の咲く季節である。世の俗人たちは、やれ花見だとかいっては浮かれ騒ぐ。小うるさいことだと言わぬばかりに、お釈迦さまはごろりと横になっている、の意で、「小うるさい」は作者の主観だが、それを信仰の対象である涅槃像と結びつけて、卑俗化したところに一茶独自のユーモアがある」。

寝ておはしても仏ぞよ花の降る

㊤ 八番日記(文政2・2)

▽ 風間本・梅塵本とも、座五「花が降る」。八番日記(2・4)、「御仏や寝てござつても花と銭」。おらが春、「ミ仏や寝ておはしても花と銭」。

語注 「花の降る」の「花」は「桜」の花ではなく、俳諧や狂歌などの添削料のこと。あるいは、芸妓や幫間などの揚げ代。また、芸人などに出す当座の祝儀、の意と見たい。

解 われらごとき田舎俳諧師は、わずかな「はな」を得るのにあくせくと動きまわっている。さすが御仏のことであるよ、寝ておいでになつても「はな」は降ってくる、の意。「寝ておはす」のは、釈迦の涅槃像。その賽銭を「はな」と見たてた。大技(おおわざ)の俳諧と言うべきだろう。

寝て起て大欠して猫の恋

㊤ 七番日記(文化14・2)・自筆句集・浅黄空・文政版発句集

▽ 自筆句集・浅黄空、中七「大欠びして」。七番日記(文化15・3)、座五「桜哉」。

解 ごろっと横になっていた猫が、背を伸ばして大あくびした。その次の瞬間、狂ったように異性を求めて、大声をあげたのである。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「寝て起きて大欠伸する恋、これを人間の恋から見ればこそ滑稽であるが、猫にとつては何等不自然はないのである。むしろ礼儀と、習慣と、教養とから歴史づけられた人間の恋を無視し反逆する者こそ嗤はれ誇らるべきであらう」。

蒲公英の天窓はりつゝ猫の恋

㊤ 七番日記(文化11・春)・句稿消息・文政版発句集

▽ 七番日記・句稿消息とも、上五「蒲公英〔英〕」の。

語注 蒲公英の天窓はりつゝ、「蒲公英の天窓」は、たんぽぽの花が終わった後の球状の種子の部分。それをびしゃりと打つようにする、の意。

解 激しい猫の恋である。「蒲公英の天窓」を、前足でびしゃりと打つようにして、恋の相手にいどみかかる。そのとき、「蒲公英の天窓」は、ふわりと周囲に飛ぶ。

門番が明てやりけりねこの恋

㊤ 八番日記(文政3・2)

▽ 座五「猫の恋」。

解 門の前で、あまりにも激しく妻を呼び続ける恋猫に、門番が閉口してそっと門の扉を開けてやった、の意。

おどされて引返すなりうかれ猫

㊤ 八番日記(文政3・2)

▽ 風間本、中七「引返す也」。梅塵本、「引返しけり」。

語注 「おどした」のも猫であろう。

解 格が違いすぎたのか、ようやく近よった「うかれ猫」は、相手の猫に「ぎやあつ」と一喝され、尾をたれてすごすごと引きあげていった、の意。

うかれ猫奇妙に焦て戻りけり

㊤ 浅黄空・自筆句集・某人あて書簡(推定文化14・2)・文政版発句集

▽ 浅黄空、中七以下「妙ニ焦てもどり〔けり〕」。自筆句集、中七以下「き妙に焦てもどりけり」。書簡・文政版発句集、座

五「もどりけり」。七番日記(文化13・3)・句稿消息、座五「参りけり」。

解 発情期を全うした恋猫は、体毛を奇妙に焦して帰ってきた。芭蕉の「猫の妻へつひの崩より通ひけり」(江戸広小路)に思い合わせたか。

恋猫のぬからぬかほで戻りけり

㊤ 文政句帳(文政7・10、8・3||重出)。

▽ 文政句帳(5・閏1)、中七以下「鳴かぬ顔してもどりけり」。

語注 「ぬからぬかほ」、ここでは、「油断のない顔つき」ではなく、「何事もそしらぬ顔つき」の意。

解 その恋を成就した猫が、そしらぬ顔をして帰ってきた、の意。あの狂い鳴きは、別の猫だったのかと思わせる。

うかれ猫どのつらさげて又来たぞ

㊤ 七番日記(文化13・1)・句稿消息・浅黄空・自筆句集  
 ▽ 七番日記、上五・中七「うかれ〔猫〕どの面さげて」。句稿消息(重出)・浅黄空・自筆句集、上五・中七「うかれ猫どの面さげて」。

解 先刻来、何度追ひ返されたかしの恋猫は、性懲りもなくまたやって来たのである。

行がけの駄賃になくや小田の雁

㊤ 板本発句題叢(文政3)

▽ 七番日記(文化9・1)、中七以下「駄ちんになくや天つ雁」。株番、中七以下「駄ちんに鳴やけさの雁」。

語注 「駄賃」、ここでは軽い謝礼、の意。

解 渡り行く途中の雁が鳴いている。休息の謝礼だろう、の意。

彼岸とて袖に這する虱かな

㊤ 八番日記(文政3・1)

解 いつもなら、ひねりつぶしてしまふ虱だが、彼岸の間だから、袖に這うのを見てもそっとしておく、の意。

▼ 萩原井泉水『一茶春秋』(昭13・育英書院)に、「此句は、普通の言葉としては、さアお彼岸のことだ、お前等も出て遊べと云つて、懐の虱を取出して袖に這はせた、といふ風に解せられるけれども、俳句としてはさうではない。たまたま、自然に這ひ出して、袖の上に這つてゐる虱が居たので、かうして虱を袖の上に這はせておくのも彼岸らしい事だな、と打興じた気持なのだ」。

板橋

かしましや江戸見た雁の帰り様

㊤ 七番日記(文化10・2)・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 句稿消息・自筆句集、前書なし。

語注 「板橋」、中仙道の最初の宿駅。「雁」、ここでは、中仙道を通って帰って行く旅の者。信州あたりの出稼ぎ者であろうか。解 何ともかしましいことであるよ。江戸の様子を物知り顔に、しかも声高にしゃべりながら帰って行くよ、の意。長年の江戸生活で、その様子を知りつくした一茶が、田舎者の半可通ぶりをにがにがしく見る。

▼ 川島『新釈』に、「板橋は昔から遊女屋などもあつて、相当に賑つた宿であつたらしいが、(中略)今江戸の方から北を指して遙々と野を越えて帰る雁の鳴連れて行くのを見送る時、恰も雁共が江戸の話を語り合つてども行くかのやうに感ぜられるのは、平常から動物に対して特殊の親しみを持つ一茶ならずともである。野に嵬した宿場の何処やら鄙びた家並に、旅人と帰雁をあしらつた道中図会の景良なども思ひ浮べられる」。勝峰『名句評釈』に、「江戸に入る人、江戸を出る人、今板橋の青楼あたりに居て、今江戸から北を指して帰り行く雁の声を耳にして居るのである。江戸を去る人は、あゝお前達も江戸を見たか。何と素晴らしかつたではないか。お前達も江戸の話で持切りかと同感したであらうし、これから江戸に行く人であつたならば、あゝお前はもう一足お先に江戸を見て来たのか。そんなに江戸が面白かつたか、どれ俺達も明日は江戸へ入つて話の種にするぞよと一種の親しみさへ感じたでもあらう。更に一面から見ると、この句は皮肉と辛辣を交へたものである。(中略)一茶にとつて生半可な江戸通は鼻持がならなかつた。そこにこの句が有るとも取れる」。伊藤『小林一茶集』に、「此句は雁そのものを詠んだと言ふよりも、むしろ中仙道を通つて信州越後方面に帰つてゆく出稼ぎの田舎者の、いつぱし江戸通がつた顔付を諷した句らしく思はれる」。栗山『小林一茶』に、「農閑期に江戸へ出稼ぎに出た信濃男たちが、春になって帰郷する姿を帰雁に託したものであらう。江戸の繁華や物珍しい様子を声高にしゃべりながら帰途につく同郷人を、一茶はうとましく「かしましや」と叫びたくなつたのであらう」。

寝た跡の尻も結ばず帰る雁

㊤ 八番日記(文政2・11)

▽ 風間本、中七「尻〔も〕結ばず」。梅塵本、中七以下「尻も結ばず帰雁」。

語注 「尻も結ばず」、きちんと後始末をしないことを言う。  
解 一夜宿った雁たちは、後始末もせずに飛び立ったことだ、の意。

閏二月十九日といふ、雨も漸おこたりぬれば、朝とく頭陀袋首にかけて、足つひで例の角田堤にかゝる。東はほのくとしらみたれど、小藪小家はいまだくらかりき。しかるに上のならせ結ふにや、川の面に天地丸赤くとうかみて、田中は新に道を作り、みぞ堀はことくく板をわたして、おのく御遊を待と見えたり、誠に無心の草木にいたる迄、春風に伏しつゝめで度御代をあふぐとは覚え侍。

五百崎や御舟をがんで帰る雁

㊤ 七番日記(文化8・閏2)・文政版発句集

▽ 七番日記、同月の条に、「五十崎<sup>(百)</sup>や御舟<sup>(百)</sup>拜んでかえる雁<sup>(百)</sup>」、「至十九句」とした後「色さくや桜所の俗坊主」の一句を書き入れ、更に「閏二十九日といふに、雨も漸<sup>(お)</sup>をこたりなれば、朝とく「頭」陀袋首にかけて」まで記して墨抹。正月の条末に、「閏一月廿九日といふ日、雨漸<sup>(お)</sup>をこたりなれば、朝とく「頭」陀袋首にかけて、足ついで角田川堤にかゝる。すでに東はほのくしらみたれど、小藪小家はいまだ閻<sup>(た)</sup>かりき。しかるに近くならせ給ふにや、川の方幽に天地丸赤くたゞよひ、田中は新に道を作り、溝川ことくく板をわたして、おのく御遊をまつと見えたり。まことに心なき草木も風に伏して、目出度御代をあふぐとも覚<sup>(え)</sup>へ侍る。『五百崎や御舟をがんで帰る雁』。文政版発句集との異同は以下のとおりである。  
「ほのく」↓「ほのく」と。「閻<sup>(た)</sup>かりき」↓「くらかりき」。「川のおもて」↓「川の面」。「うかめて」↓「うかみて」。「見へたり」↓「見えたり」。「めでたき」↓「めで度」。「あふぐとぞ」↓「あふぐとは」。「覚へ侍る」↓「覚え侍る」。

語注 「五百崎」、向島辺(墨田区)の古名。「庵崎」と書もいた。

解 はなやかな徳川將軍の舟遊び、雁たちもこの賑いであって、今、北に向って渡って行く、の意。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「時は雁の帰る季節、この賑かな、色やかな將軍様の御舟遊びを拝観して喜んで北へ帰るのを祝福した句であり、自分もその盛儀を有難く拝むといふ心持を暗に叙べた一句である」。

善光寺

開帳にあふや雀も親子連

㊤ 浅黄空・だん袋

▽ 浅黄空、中七「逢ふや雀も」。七番日記（文化15・3）、中七以下「逢ふや雀のおや子連」。

語注 「開帳」、厨子のとばりを開いて、秘仏を拜ませること。善光寺の例開帳は十五年に一度。

解 老若男女にまじって、雀の親子までが御開帳にやって来た、の意。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「わが子に伴なはれての老翁老婆の参詣者に伍して雀の親子も、今年この盛儀にやつて来たぞよの意。人間の親子がむつまじく参詣するのを暗示しつゝ、いつも動物への愛を忘れぬ一茶は、ふと目に入れた雀に、あゝお前達親子もお如来様へ参詣に来たのかと微笑ましく感じたのである」。

雀子や川の中にて親を呼

㊤ 梅塵本八番日記（文政2）

▽ 座五「親を呼ぶ」。風間本八番日記（2・2）、中七以下「川の中迄親をよぶ」。

解 水に入った雀子が、しきりに親雀を呼んでいる、の意。「川」は、水の少ない小さな川であろう。この年起稿の『おらが春』（第十三話）に、「所有畜類是レ世々ノ親族ナリとなん。親をしたい、子を慈む情、何ぞへだてのあるべきや」と記して、動物の恩愛をテーマとした自他の発句六句が収めてある。同時期の作とみてよからう。

雀の子そのけく御馬が通る

㊤ 八番日記（文政2・2）・おらが春・文政版発句集

▽ 八番日記、中七「そのけく」。

語注 「雀の子」、被支配者階層の位置や力を象徴するもの。街道の端に土下座して、武家の行列を見送る農民の姿は、まさに「雀の子」にも比すべく、あわれにも小さかった。「そのけく」「狂言『対馬祭』に、「馬場退けく、お馬が参るく」、黄表紙『稚衆忠臣蔵』に、「ぬしはおれひとり、おんまが通る、さきのけつ、さきのけつ、はいく」。「けむからんそこ

のけくきりくす(文化9)、「やよそのけく湯がはねる」(文化13)などもある。「御馬」、支配者階級たる武家の馬。その「御」という文字に、その権力が象徴的に表現されている。

解 狂言言葉などにみられる「そのけく」を使って、子どもらの馬ごっこのかけ声に見せかけ、時代や社会に対する批判精神を発揮したのである。「馬迄もはたご泊や春の雨」(文政2)、「涼まんと出れば下にく哉」(文化14)などが、解釈の参考になろう。

▼ 川島『新釈』に、「畦道などに雀の子が三々五々下り立つて居る中を、馬曳いて行く人の親しげな気持或は、傍観してゐる人の稍々はらくした気持が感ぜられる」。勝峰『名句評釈』に、「雀がちよく餌あさりに夢中になつて居る。そこへ馬が来る。あゝあぶない。早くよけるよ。この気持が自ら舌頭に迸り出たのがこの句だ。(中略)又かうも解釈される。子供が竹か木の棒をまたいで馬ごっこしてゐる。それがお殿様のお通りだぞ。『雀の子、そのけく』と、馬上を気取る子供自身が呼びかけた様にした作意にも解釈される」。勝峰『一茶のおらが春』に、「雀の子の黄色いくちばしは、往来のこぼれ餌を拾ふのに忙がしい。はいどう、はいどう、公儀御用の馬を幸領してそこへ来かゝる。あぶないッ、さつさと飛んでのける。ふまれ蹴られたらどうする。苦労性の一茶の顔に不安な影がさす。そんな時に『馬場退けく、御馬が参るく』の狂言言葉が、そのまゝ口合ひのやうに、一茶の唇を綻びさせたのであらう」。伊藤『小林一茶集』に、「『そのけそのけお馬が通る』と言ふのは、昔子供が竹馬や玩具の馬に乗つて歩く時の掛声であつた。一茶は雀の子が馬にふまれぬ様にと注意を与へるのに此常套文句を引用したのであらう」。川島『おらが春新解』に、「そのけそのけと、権柄な調子を雀に配したところに、おのずからなるユーモアがある。この句の解釈については、狂言言葉『馬場退けく、お馬が参るく』(対馬祭)に拠つてゐるという説。あるいは当時の子供が竹馬や玩具の馬に乗つて歩く時、先のけ先のけと、かけ声することに興味を持ったので、真物の馬ではないとも説かれてゐるが、いかがであらうか。(中略)長いあいだ雪に埋れてゐた街道の黒い土、道ばたに群れてゐる子雀、眠りからさめたやうに盛んになってくる車馬の往来。そのけそのけお馬が通る通るである。一茶の心が子雀と一緒にどつてゐるやうである」。萩原『芭蕉名句集』(一茶篇)に、「この句は、平生あまり人通りのない田舎の街道の感じがでてゐる。人通りがすくないから、雀の子が往来に出てきて遊んでゐるのだ。そこに馬がやってくる。それを『お馬』といったのも、雀の子を人間の子供のやうに見て、子供のつかう言葉を使ったのがおもしろい。(中略)それが米か麦かを運んでいる馬であれば、俵から種粒がこぼれがちなものだから、そうして駄馬がおりおり通るやうなところでは、雀は危険をおかしても、馬のそばに寄ってくるものなのである」。加藤『秀句』に、「『そのけ』という

表現はよほど一茶の気に入ったものらしい。元来この語は大名の供先が道の人を退けるときなどに使われて、格式ばったひびきがある。柏原にいたころの少年一茶の耳に、参覲交替の加賀侯の先触が威儀を正して入ってきたときのこの言葉、江戸生活で武士の口から町人に向けて出るときこの言葉、それを巧みに一茶化して生かしているようだ。丸山一彦『一茶秀句選』(昭50、評論社)に、「子供の遊びに、赤貝などの殻に緒を通し、うつ向けにしてはいて歩くと、ばかばかと馬の足音がする。この赤貝の馬や、竹馬などに乗って、『お馬が通る、先のけ、先のけ』と囃しながら走り回る風習は、地方にも多く残っているが、近世の黄表紙などにもその例が見える。『山のぬしはおれひとり、おんまが通る、さきのけっ、さきのけっ、はいはい』(『稚衆忠臣蔵』寛政十二年刊)。一茶の句も、この語を利用したもので、貝殻の馬に乗って元氣よく走り回っている子供が、よちよち歩きの雀の子に呼びかけたさまである」。

### 竹にいざ梅にいざとや親すゝめ

㊤ 稿本発句題叢・句稿消息・希杖本句集・文政版発句集

▽ 発句題叢・句稿消息・文政版発句集、座五「親雀」。七番日記(文化11・3)、「竹に來よ梅に來よとや親雀」。浅黄空・自筆句集、「松にいざ竹にいざとや親雀」。

解 わが子が絵になるように、そう願っての親心である。

### 我と来て遊や親のない雀

㊤ 嘉永版発句集初出

▽ 中七「遊べや親の」の「べ」脱か。句稿消息、前書「八歳の時」。中七「遊ぶや親の」。自筆句集、中七「遊ぶや親の」。七番日記(文化11・1)、中七「あそぶ親の」。浅黄空、前文「親のない子ハ肩身でしれるなど、唄れ、心くるしく、うらの毛小屋〔に〕一人日なたぼこして」。中七以下「遊ぶ親のない雀 八・時」。おらが春、前文「親のない子はどこでも知れる、爪を啜へて門に立と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に踞りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり」。中七以下「遊べや親のない雀 六才弥太郎」。発句鈔追加、前文「門に立つ」を「門に立つ」とするほかは文・句とも、おらが春に同じ。ただし、「六才弥太郎」を省く。なお、資料としてただちに採用し

がたいのだが、『若水帳』(『一茶遺墨鑑』所収)に、「親のない子ハどこでも知れる。爪を啜へて門に立と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木、萱など積たる片陰に踞りて、長の目をくらしぬ。我身ながらも哀也けり。『我と来て遊べや親のない雀 六才弥太郎』とある。「六才」の下に薄く文字の影のようなものが見える。これは全く判読しがたく、『遺墨鑑』にも翻刻はないが、川島『新釈』に、「土地の一研究家の口づから、『おらが春』と殆ど体裁を同じくする同じ文政二年自筆の若水帳の中に、『六歳の頃を思ひ出て』と記されてあるといふことを注意されたのであった。それで、一茶遺墨の写真帳に幸ひその条があつたので、非常に注意して見ると、確に『六才の頃を思ひ出て』或は『忍びて』と読み得る文字を見出し得たのであつた」とあり、丸山一彦・栗山理一などこれを採用する人が少なくない。

解 ひとりぼっちでいる親のない雀よ、こっちへ来て一緒に遊ぼうよ、の意。「六才弥太郎」は、六歳のころを思い起こして、の意。もちろん、『おらが春』(第十話)にみられるような作中の六歳である。

▼ 川島『新釈』に、「気儘に筆を取つて居るうちに幼児のことを思ひ出て、この頃の気持ちになつて一句ものして、特に昔懐しく弥太郎と署名したものと思はれる。それ(注、『若水帳』)を転写する際に、作者の心を掠めた誘惑のために、故意に『の頃を思ひ出て』惑は『忍びて』を削除したものではなかつたらうか。それは晩年に及んで彼の名が相当全国的となるに従つて、彼も亦彼自身の生立を一寸ばかり飾つて見たくはなかつたか。若し左様だとしたら、それは寧ろ涙のこぼれるほど弱い人間性の発露であると云ひたい。黒沢『研究』に、「人目を避けて下枝に友を呼ぶ小雀は実は一茶の心にひた／＼となつかしい思ひをよせるのでありました、無雑作な唯々云はないでは居られない環境に導かれてゐた彼の親のない雀の芽生は悲惨であります、けれどもこの心持が彼が死ぬまで俳句を詠ひつゞけた心持であつたらうと思ひます。(中略)これは彼六才のときの悲しい独り言です。世人が称して俳句と云ふが、そんな人為的な色彩はうすいものであります。——彼はつゞましく一生涯この独り言を云ひつゞけてゐたものであります。これが即ち、彼、一茶の詩境の源泉であります」。暉峻『名句の鑑賞』に、「句意は解くまでもなく、親のないひがみから人交りもせぬ少年一茶が、淋しさの余り友を求めてゐるのです。勝峰『一茶のおらが春』に、「母のいつくしみを知らない一茶は、親のない子とはやされるのを厭がつたらうが、父がある。祖母がある。かばひもすれば、可愛がつてもらへる。たゞ淋しいのは友達のないことである。睦しく餌を拾つてゐる雀の群れを、そつと眺めてうらやましくも思へたらう。その雀への呼びかけが、親のない雀であつたのである。村のわんぱくから、のけ者にされるつらさは、あの雀にもこんな気持にちん沈むものがあつたら、きゆつと手を握りたいと思ひ詰めたことであらう。六歳の作で、ちつとも不自然でない」。荻原井泉水『一茶名句』(昭34・社会思想社)に、「裏の庭に出

て、ひとり遊んでいると、雀がたくさんその辺に来ている。その雀の中には、親がなくて淋しい雀もあろう。『まます子』の雀よ。自分と遊ぼうではないかという気持。それで、一般的に愛誦されているのだが、実のところこれは、前にも書いた通り追憶であるばかりか、文学作品として作ったものであって、一茶の実感だといってしまふことはできない。川島『一茶集』に、「いずれにしても幼時の追憶と見るべきである。八歳は継母入稼の年で、一茶のために特に感銘が深かったはずである。八歳から六歳に移行させたことについては、早期天才の発路を誇ろうとする素朴な虚栄心とも考えられる」。丸山『秀句選』に、「句は、巢から落ち、親に離れて鳴いている子雀に呼びかけたもの。『親のない子と離されて、いつもひとりぼっちのおれだよ。子雀よ、お前も親がないのか。さあ、こちらへよって来い。親のないもの同士でいっしょに遊ぼう』という意」。金子兜太『一茶句集』(昭58・岩波書店)に、「句意は至極明瞭で、△あの子雀には親がないようだな。おい、こっちにこいよ、親なし雀。おれも親なしなんだ。いっしょに遊ぼうよ。なあ、遊ぼうよ。▽ということだが、『遊べや』は本州東部の方言『べー(なになにだんべー)といったいいかた)が織り込まれた、△遊んべーや▽と受取る」。

### 雀子やお竹如来の流しもと

㊤ 七番日記(文化14・2)・文路あて書簡(文化14・3・15)・文政版発句集

▽ 七番日記、座五「流し元」。書簡、前書「心光院にて」、座五「流し元」。

語注 「お竹如来」、「武江年表」に、「寛永の頃、大伝馬町の豪家佐久間某が家の婢女たけといふもの、仁慈の志厚く、朝夕の飯米菜蔬、我食ふべき物を乞丐人に施し、其身は主家の残れると、又は流しの隅に網を釣てたまりし物を食し、常に称名怠る事なし。しかるに武州比企郡に住む何がし行者、湯殿山に参詣し生身の大日如来を拜せん事を願ひしに、わが形容を看んとならば、江戸に趣き佐久間某が婢女たけを拜すべしといふ靈夢の告を蒙り、彼家にいたり竹女を拜す。其後竹女は念仏三昧して大往生を遂たりといふ。其後佐久間の親ぞく馬込某より大日如来の像を造らしめて、湯殿山黄金堂に納む。これを世にお竹大日如来といふ」。

解 台所の流し下で、飯粒などをついばむ雀の姿に「お竹如来」の伝説を思い合わせたのである。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「雀が流し下で流し捨てられた飯粒をこくめいに拾つて食べてゐることを、お前たちもまたお竹如来か、けなげぞや〜と誉めそやす気持になつてかう読んだのである」。

慈悲すれば糞をするなり雀の子

㊤ 文政句帳(文政7・4)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 文政句帳以下いずれも、中七「糞をする也」。

語注 「慈悲すれば」、ここでは、巢から落ちたのであろう子雀を拾いあげて、手のひらにでも乗せたのであろう。

解 かわいそうにと、拾って手のひらに乗せたのに糞をされてしまった。この子雀に、の意。一茶晩年の「軽み」である。

▼ 川島『新釈』に、「一茶のふくれた顔を想起せしめる。一茶はよう向ッ腹を立てた——それは彼の臆病のために多くの場合内発に終つた——その痼癢は屢々作品の上に投げられて居る。世の中は要するに慈悲すれば糞をする雀の子である。(中略)この句も決して諧謔の意味でうたはれて居るのでないことは、この愛嬌のない投付けたやうな調子が証明して居る。然し相手が雀の子であれば、これ以上突かゝり場もなかつたのである」。勝峰『名句評釈』に、「恩を仇で返されることは常人に取つて堪へられぬことである。世間には慈悲すれば糞をする雀が多い。しかしこの句には憤激の情は少しも出てゐない。糞を雀にかけられた一茶は腹を立てるよりは、笑つてゐる。(中略)私はこの句を、だから、世間に対する咒咀とよりは一茶の動物愛の発露と見たい」。伊藤『小林一茶集』に、「慈悲すれば糞をする(恩を仇でかへす意)と言ふ諺を利用した句」。加藤『一茶秀句』に、「巢から落ちた雀の子を掌の上に乗せて、頭や背を撫でていたわつてやる。すると雀の子は糞をしてしまったのだ。『慈悲すれば糞をするなり』は、こちらの気持があだになった、やりきれない気持を詠んでいるのである」。

雉子なくやきのふ焼れし千代の松

㊤ 文化句帳(文化4・3)・文政版発句集

▽ 前書「小金原」。

語注 文化句帳の前書「小金原」、下総にあった官馬の放牧場。上野牧・中野牧・下野牧・高田牧、印西牧の総称。『寛政三年紀行』の三月二十九日条、「此原は公の馬をやしなふ所にして、長さ四十里なるをもて、四十野といふ」。

解 雉子がしきりに鳴いている。昨日、雑草とともに刈り取られて、焼かれた千代経べき小松の齡を惜しむように、の意。

雉子なくや見かけた山のあるやうに

夕雉子のはしり留りや鳩の海

㊤ 七番日記(文化9・3)・株番・稿本発句題叢・発句鈔追加

▽ 題叢、上五「雉鳴や」。発句鈔追加、上五「雉子啼や」。希杖本句集、「雉子鳴や見置た山の有やうに」。

解 一羽の雉子が鳴きながら飛んで行く、その後を何羽かが追うように飛んで行く。いかにも、熟知の山がそこにあると言わんばかりに、の意。

㊤ 文政版発句集初出

▽ 中七「走り留りや」。七番日記(文化10・3)、中七以下「走り留りや草と空」。

語注 「鳩の海」、琵琶湖の別称。

解 まっ青な琵琶湖面をめざして雉子が飛んで行く。あのあたりが雉子の目指す地点なのだろう、の意。

黒門や下たに／＼雉子の声

㊤ 文政版発句集初出

▽ 中七「下たに／＼と」。七番日記(文化15・2)、前書「上野」、上五・中七「御通りや下〔に〕／＼と」。八番日記(文政4・9)、上五・中七「駕先に下への声と」。だん袋、前書「東叡山」、上五・中七「駕さきやしたに／＼と」。発句鈔追加、前書「東叡山」、上五・中七「駕先や下に下にと」。

解 黒門の建ち並ぶ屋敷町、その屋敷の中から雉子の鳴くのが聞えてくる。それがいかにも「下に／＼」と声を掛けているように聞えるというのである。

雀子のはやしりにけり隠れやう

㊤ 七番日記(文化9・3)・稿本発句題叢・浅黄空・自筆句集・希杖本句集・発句鈔追加

▽ 七番日記、座五「かくれ様」。題叢、座五「かくれやう」。浅黄空、座五「隠れ様」。自筆句集・発句鈔追加、中七以下「は

や知りにけりかくれやう」。希杖本句集、中七以下「はや知りにけり隠れやう」。  
解 巢立って間もない子雀である。人が近づいたりすると、さっと姿をかくしてしまふ。十分に翼を使うことができないの  
に。

### 独座

おれとしてにらみくらする蛙哉

㊤ 梅塵本八番日記(文政2)・おらが春・浅黄空・自筆句集・李園あて書簡(文政2・2・15)・文政版発句集

▽ 梅塵本八番日記、中七「白眼くらする」。自筆句集、前書なし。風間本八番日記(文政2・2)、中七「かぶみくらする」。  
語注 「おれとして」、おれとともに、の意。「にらみくら」、にらめっこ。

解 ひとり腰をおろしていると、その前に出てきた一匹の蛙が動きを止め、じっとこっちを見ているふうだ。一茶もまた、じ  
っと蛙の目を見つめる。家庭的にも最も充実していた、このわずかな時期、一茶の心は安定し、時にはこんな余裕もあった  
のである。なお、前書の「独座」について、川島・勝峰両氏とも「独座一榻ニ満ッ」(随書・韋芸伝)をあげて解説するが、  
詳しい詮索は無用であろう。

▼ 勝峰『一茶のおらが春』に、「両手を揃へて突き、胸を張りかげんに、首をあげている蛙の姿は、悠然として迫らない独  
座の構へである。その趣に叶つたあまいである。くるりと大きいその目を動かさず、ちつと空に据ゑてゐるありさまは、  
見詰めるものゝない癖にと思へば、自分で自分と睨みくらしてゐるのである。一茶の奇警な観察に手を拍たねばならない」。  
川島『おらが春新解』に、「術学癖のある一茶のことゆえ、前書は成語によつたと見るべきであろう。(中略)本気でにらめ  
っこしたら、こちらが負けそうな、凶ぶとげな蛙の姿態をあらわすためにこの前書は利いている。句意は、おれとにらめく  
らをしている蛙であることよ、の意。伊藤『小林一茶集』に、「独座して居る一茶に対して、庭前に罷り出た蛙がにらみつ  
こして居るのである」。中島『小林一茶集』に、『おれとして』は、おれとともに。おれに対してにらめっこをしているよ  
うだの意。宮本『俳句大観』に、「ひとり静かに坐っていると、庭先に出て来た一匹の蛙が両手を揃えてつき、首をあげて  
その目を動かさず、じつとこちらを見据えている。蛙と俺とにらめっこをしているんだなと、蛙と二人だけで向かい合っ  
ている瞬間をこの作者特有の奇警な観察でよみ出した句」。